

中級教科書『出会い』におけるタスクの設計

工藤嘉名子

【キーワード】 中級教科書、『出会い』、タスク、タスク設計、下位タスク

1. はじめに

東京外国語大学留学生日本語教育センター（以下JLC）では、教育研究開発プロジェクトの一環として、中級レベルの学習者を対象とした総合教科書を開発中である。教科書のタイトルは、『日本で学ぶ留学生のための中級教科書 出会い』（以下『出会い』）である。本書は、JLCの全学日本語プログラム¹の中級後半レベルの総合クラス²で使用することを当初の目的として作成されたものである。【本文・タスク編】と【文型・表現練習編】の2分冊構成であるが、ここでは、【本文・タスク編】について報告する。

本書は、日本社会・日本文化に関する6つのテーマと、テーマに関連した4つのタスクとで構成されている。本稿では、教科書のタスクに焦点を当て、①本文のテーマとタスクの関係、②タスクの目的と学習項目、③タスクの到達目標、④タスクと下位タスクの関係という4つの観点から、タスクをどのように設計したかについて述べる。

2. 教科書の概要

『出会い』の対象は、主に、日本国内の日本語教育機関で学ぶ中級後半レベルの学習者である。交換留学生のための日本語プログラムや、夏期コースなどの短期集中プログラム、学部・大学院進学のための予備教育課程など、多様なプログラムを想定している。日本語能力試験N4合格以上の学習者であれば、中級前半レベルの学習者でも本書で学べるよう、ルビや語彙リストを整備してあるが、中級後半かそれに近い学習者向けの内容や表現となっている。

¹ 全学日本語プログラムは、協定校からの交換留学生や国費研究留学生、日本語・日本文化研修留学生など、様々なカテゴリーの留学生のためのプログラムで、初級（100レベル）から超級（800レベル）までの8レベルに分かれている。

² 科目名は「中級2 総合日本語 401」である。

本書では、日本社会・日本文化に関するテーマの学習と、地域社会や地域の人々との関わりを促すタスクを通して、以下の3つの力を養うことを目的としている。

- ① 自分自身や身近な他者、地域社会との関係性の中で、日本社会や日本文化について日本語で理解し、考える力
- ② 自分が調べてわかったことや考えたことを日本語で伝え合う力
- ③ クラスメイトや教室の外の人々と積極的に関わっていく力

インターネット等のメディアを通して、世界中どこにいても日本に関する情報が手に入る今日だからこそ、日本に留学することでしか得られない「出会い」や学びを実現したいというのが本書に込められた思いである。

3. 本文のテーマとタスクの関係

3.1 本文のテーマ

本書で取り上げた6つのテーマは、「異文化との出会い（第1課）」「人生とキャリア（第2課）」「地域と共に生きる（第3課）」「自然との共生（第4課）」「『食』にみる世界（第5課）」「子どもと教育（第6課）」である。いずれも日本社会や日本文化と関わりが深いテーマで、日本社会の中で留学生に一度は考えて欲しいテーマである³。

各課には、トピック1（読解教材）とトピック2（聴解教材）の2つのトピックがあり、読む・聞くという活動を通して、その課のテーマについて多面的に学べるようになっている。たとえば、第3課「地域と共に生きる」では、トピック1で「商店街」、トピック2で「老舗の豆腐屋」を具体的事例として取り上げ、それらの歴史や地域との関わりについて学ぶことができる。

また、6つのテーマは、自分や身近な他者との関わりを考えるもの（第1課・第2課）から、身近な地域社会との関わりを考えるもの（第3課・第4課）、日本と世界との関わりを考えるもの（第5課・第6課）へと、その文脈が広がるよう配列してある。同時に、内容や表現の抽象度・難易度も高くなるよう構成されている。なお、本文は、主として、専門家や関係者へのインタビューや現地取材に基づき書き下ろしたものである。

³ これらのテーマは、国立大学の全学教養教育科目のシラバスを対象に実施したテーマ分析の結果に基づき選定したものである（大津・工藤2012）。

3.2 テーマとタスクの関係

本書には、それぞれのテーマについて学んだことをもとに、地域社会や地域の人々と積極的に関わっていくための4つのタスク(発表とインタビュー)がある⁴。タスクは、そのテーマについて学習者自身が調べたことや考えたことを日本語で発信していくためだけでなく、地域社会や地域の人々との関わりの中で、テーマについての理解を深めるためのものである。各課のテーマとタスクの対応は、表1の通りである。以下に、それぞれのテーマとタスクがどのように関連づけられているか述べる。

表1 『出会い』の6つのテーマと4つのタスク

課	テーマ	タスク	
第1課	異文化との出会い	タスク1	発表「街で見つけたおもしろいもの」
第2課	人生とキャリア	タスク2	インタビュー「私のキャリアプラン」
第3課	地域と共に生きる	タスク3	発表「地域の名所を紹介する」
第4課	自然との共生		
第5課	「食」にみる世界	タスク4	インタビュー「私のボランティア経験」
第6課	子どもと教育		

第1課「異文化との出会い」では、「日本留学で出会う異文化」をテーマとした本文の学習を行った後、タスク1で、学習者自身が日本で見つけた「おもしろいもの」の写真を撮り、日本文化について不思議に思ったことや考察したことを発表する。ここでは、「自分というフィルターを通して見た日本」という共通項で、テーマとタスクが結びついている。

第2課「人生とキャリア」では、日本の「就活」や日本企業で働く元留学生の職場体験について学んだ後、タスク2で、キャリアプランについて日本人学生にインタビューする。ここでは、「日本の就職事情と若者の職業選択意識」という共通項で、本文のテーマとタスクが結びつく。

第3課「地域と共に生きる」では、「商店街」と「老舗の豆腐屋」を取り上げ、その

⁴ タスクは、国立大学の全学教養教育科目のシラバスを対象に実施した知的活動に関する基礎調査の結果に基づき選定した(工藤・大津2011)。

歴史と地域との関わりについて学ぶ。第4課「自然との共生」では、「里山」と「自然と共生する城下町（松代）」を事例として、昔と今の人と自然との共生のあり方について学ぶ。この2つの課の学習の後、タスク3で、地域の名所の歴史や地域との関わりについて調べたことを発表する。ここでは、「地域の歴史とそこに暮らす人々の思い」という共通項によって、テーマとタスクが結びついている。

第5課「『食』にみる世界」では、「フェアトレード」と「フードマイレージ」を事例として取り上げ、「食」に関わるグローバルな問題とその解決に向けた取り組みについて学ぶ。第6課「子どもと教育」では、外国人児童生徒の問題と「NPO 法人ラオスのこども」の活動に焦点を当て、子どもの教育に関する問題とそれに対する支援について学ぶ。これらの本文学習に続いて、タスク4で、社会問題解決のために活動しているボランティアの人にインタビューし、ボランティア活動の内容や体験談について報告し合う。ここでは、「身近な社会問題とその解決に向けた具体的な取り組み」という共通項によって、テーマとタスクが結びつく。

このように、各課のテーマとタスクは、密接で必然的な関係にある⁵。テーマについての理解をさらに深めるためにタスクの遂行は不可欠であり、タスクの遂行にはテーマに関する内容的知識と日本語が不可欠なのである。

4. タスクの目的と学習項目

4.1 タスクの目的

本書には上述した4つのタスクがある。2つの口頭発表と2つのインタビューである。これら4つのタスクを通して、最終的には、社会的・文化的テーマについての口頭発表のし方と、インタビューとその報告のし方を習得することを目指している。

4つのタスクには、表2に示すように、それぞれ、①テーマ理解と②言語運用の2つの側面から目的が設定されている。本書では、教師と学習者が予め目的を認識、共有した上でタスクが進められるよう、これらの目的を各タスクの冒頭の説明に挙げてある。

⁵ 山本(2007)『国境を越えて[本文編]改訂版』、山本・瓜生・甲斐(2007)『国境を越えて[タスク編]』は、コンテンツ(テーマ)とタスクを融合させた画期的な教科書である。開発中の教科書のテーマとタスクの設定において、これらの教科書から得られた示唆は大きい。なお、コンテンツとタスクの必然的な関係については、山本(2012)が詳しい。

表2 『出会い』の4タスクとその目的

①テーマ理解の側面、②言語運用の側面

タスク		タスクの目的
タスク1	発表 「街で見つけたおもしろいもの」	① 街で見つけた「おもしろいもの」を通して、日本文化や自文化について考える。
		② 自分がおもしろいと思ったものについて、自分以外の人にもそのおもしろさが伝わるような説明のし方を学ぶ。
タスク2	インタビュー 「私のキャリアプラン」	① 日本人学生のキャリアプランに対する考え方を知り、自分自身の将来について考える。
		② 適切なインタビューのし方と、スライドを使ったインタビュー報告のし方を学ぶ。
タスク3	発表 「地域の名所を紹介する」	① 身近な地域の名所について、その歴史や地域との関わりを知る。
		② 自分が紹介したい場所の特徴や魅力が聞き手に伝わるような発表のし方を学ぶ。
タスク4	インタビュー 「私のボランティア経験」	① 身近なところでボランティア活動をしている人にインタビューし、ボランティア活動の意義について考える。
		② 相手に応じた適切なインタビューのし方と、インタビュー報告書の書き方を学ぶ。

4.2 タスクの学習項目

前述したタスクの目的設定のもとに、アカデミック・スキルと言語表現の2つの側面から、タスクの学習項目を選定した。ここでの「アカデミック・スキル」は、学部・大学院での知的活動に必要とされる学術的知識と思考力、表現力を指す⁶。口頭発表であれば、①テーマ選定、②情報収集・整理、③アウトライン作成、④原稿作成、⑤スライド作成、⑥発表、⑦意見交換・議論といった一連のプロセスの中で必要とされる能力である。本書では、各タスクについて、中級後半レベル

⁶ 工藤(2010)は、「アカデミック・ジャパニーズ」の3本柱として「学術的知識」「思考力」「表現力」を挙げている。本稿では、これらの知識・能力の総称として「アカデミック・スキル」という用語を用いる。

の学習者にとって必要だと思われるアカデミック・スキルの具体的手法と、その遂行において特に重要だと思われる言語表現を学習項目として取り上げている。表3に、本書のタスクにおける主な学習項目を示す。

タスク1では、自分が撮った「おもしろいもの」の写真を見せながら、日本文化について不思議に思ったことや考察したことについて発表する。そのため、「テーマ(題材)の選び方」「アウトラインの作り方」「原稿の書き方」「発表のし方」をアカデミック・スキルとして取り上げ、「定義を説明する表現」「疑問を表す表現」「意見を述べる表現」を言語表現として取り上げている。

タスク2では、キャリアプランについて日本人学生にインタビューをして、その結果をスライドにまとめて発表する。ここでは、「インタビューシートの作り方」「インタビューのし方」「スライドの作り方」というアカデミック・スキルを新たな学習項目として取り上げる。また、言語表現として、インタビューに必要な「確認・聞き返しの表現」「あいづちの表現」と、インタビュー報告に必要な「引用・伝聞の表現」を導入する。このように、タスク1とタスク2で発表とインタビューの基礎づくりをしてから、タスク3とタスク4に進む。

表3 『出会い』の4タスクの主な学習項目

★印は新出の学習項目

タスク	アカデミック・スキル	言語表現
1. 発表 「街で見つけたおもしろいもの」	①テーマ(題材)の選び方★ ②アウトラインの作り方★ ③原稿の書き方★ ④発表のし方★	①定義を説明する表現★ これは～といます／～という のは～のことです ②疑問を表す表現★ [疑問詞]～んだろうと思いました ③意見を述べる表現★ ～んじゃないかと思います
2. インタビュー 「私のキャリアプラン」	①インタビューシートの作り方★ ②インタビューのし方★ ③原稿の書き方 ④スライドの作り方★ ⑤発表のし方	①確認・聞き返しの表現★ ～ですね／～って何ですか ②あいづちの表現★ ああ、そうですか／へえ、そう なんですか／ふうん、なるほど ③引用・伝聞の表現★ ～そうです／～ということ です／～さんは～と言っていました

3. 発表 「地域の名所を紹介する」	①テーマ(題材)の選び方 ②情報収集・整理のし方★ ③アウトラインの作り方 ④原稿の書き方 ⑤スライドの作り方 ⑥発表のし方	①引用・伝聞の表現 ②意見を述べる表現 ③短くコメントする表現★ ～ですな/～ですよ
【発展】レポート 「地域の名所」	①レポートの書き方 (発表とレポートの表現の違い)★	①レポートの文体★ (「である」体) 文末表現、接続表現 他
4. インタビュー 「私のボランティア経験」	①インタビューシートの作り方 ②インタビューのし方 ③報告書の書き方★ ④口頭での報告のし方★	①敬語★ ～ていらっしゃる/～なさる 他 ②確認・聞き返しの表現 ③あいづちの表現 ④レポートの文体 ⑤引用・伝聞の表現

タスク3では、自分が選んだ地域の名所について、インターネットで情報検索をしたり、その場所をよく知っている人に話を聞いたりといった情報収集を行い、その情報を整理しなければならない。そのため、「情報収集・整理のし方」というアカデミック・スキルを取り上げる。また、発表の際に聞き手を引きつけるような短いコメントや感想の表現を学習項目としている。さらに、発表した内容をもとにレポートを書くという発展タスクにおいて、「レポートの書き方」を取り上げ、発表の表現との対比で「レポートの文体」(「である」体)を導入する。

タスク1～タスク3で発表に関わるアカデミック・スキルがほぼ網羅されるため、タスク4では、「ボランティア経験」についてインタビューして報告書を作成した後、発表ではなく、インタビュー相手の異なる学習者同士でグループを作り、それぞれのインタビュー結果を報告し合う。ここでは、「報告書の書き方」とその「口頭での報告のし方」に加え、目上のゲストへのインタビューに必要な「敬語」を取り上げる。

このように、タスクは徐々に複雑かつ高度になっていくが、前のタスクで学んだことを応用しながら新しい課題がこなせるよう、既習の項目に新たな項目を加える形で学習項目が配列してある。異なるタスクの中で、同じ項目について繰り返し学習することで、学習者は段階的に発表やインタビューに必要なアカデミック・スキルと言語表現を身につけていくことができると考えている。

さらに、本書は、4つのタスクを通して、話し言葉と書き言葉の適切な使い分けができるような設計になっている。タスク1とタスク2は「です・ます」体を中心であるが、タスク3の発展タスクで「である」体の書き言葉を導入する。ここでは発表の「です・ます」体からレポートの「である」体への変換を、次のタスク4では報告書の「である」体から口頭報告の「です・ます」体への変換を図っている。こうした言語活動によって、ジャンルや場面に応じた話し言葉と書き言葉の使い分けが意識できるようになると考えている。

5. タスクの到達目標

本書では、各タスクの最後に到達目標を示した「Can-do チェック表」を設け、それぞれのタスクを通して、何がどの程度できるようになったか、学習者自身が自己評価できるようになっている。Can-do チェック表は、タスク全体についての大きな評価項目と、タスクの成果物やパフォーマンスに関する細かい評価項目から成る。基本的に、タスク全体の評価項目は前述したタスクの目的を到達目標に置き換えたもので、下位の評価項目はタスクの学習項目を反映させたものである。各項目は、「そう思う」「少し思う」「あまり思わない」「思わない」の4段階で評価できるようになっている。図1に、タスク1のCan-do チェック表を例に示す⁷。

タスク1 Can-do チェック表	
	名前()
【タスク全体について】	
① 街で見つけた「おもしろいもの」を通して、日本文化や自文化について考えることができた。	
	<input type="checkbox"/> そう思う <input type="checkbox"/> 少し思う <input type="checkbox"/> あまり思わない <input type="checkbox"/> 思わない
② 自分がおもしろいと思ったものについて、自分以外の人にもそのおもしろさを伝えることができた。	
	<input type="checkbox"/> そう思う <input type="checkbox"/> 少し思う <input type="checkbox"/> あまり思わない <input type="checkbox"/> 思わない

⁷ 実際の教材には、旧日本語能力試験2級以上の漢字を含む語にルビが振ってある。

【発表について】

- ① 発表の目的に合ったテーマを選ぶことができた。
 そう思う 少し思う あまり思わない 思わない
- ② 「はじめに」「本論」「おわりに」の3部構成で話すことができた。
 そう思う 少し思う あまり思わない 思わない
- ③ 写真を見せながら、物の定義や特徴をわかりやすく説明することができた。
 そう思う 少し思う あまり思わない 思わない
- ④ 自分が疑問や不思議に思った点について、わかりやすく話すことができた。
 そう思う 少し思う あまり思わない 思わない
- ⑤ 適切なスピードや声の大きさを話すことができた。
 そう思う 少し思う あまり思わない 思わない
- ⑥ 聞いている人の方を見ながら話すことができた。
 そう思う 少し思う あまり思わない 思わない
- ⑦ 他の人の発表を聞いて、積極的に質問やコメントをすることができた。
 そう思う 少し思う あまり思わない 思わない

図1 タスク1のCan-doチェック表

タスク1のCan-doチェック表は、タスク全体に関わる2つの評価項目と、発表に関わる7つの下位項目から成っている。タスク1同様に、タスク2からタスク4のCan-doチェック表も、タスク全体の評価項目とその下位項目から成る。下位項目には、複数のタスクで共通の評価項目が含まれる。それは、前節で述べたように、同じ学習項目が複数のタスクで繰り返し取り上げられるためである。次頁の表4に、複数のタスクに共通する評価項目を示す。ただし、実際の文言は、タスクによって多少異なる。

表4 複数のタスクに共通する評価項目

「タ」=「タスク」

下位の評価項目	タ1	タ2	タ3	タ4
① 発表の目的に合ったテーマを選ぶことができた。	○		○	
② 適切なスピードや声の大きさと話ることができた。	○	○	○	○
③ 聞いている人のほうを見ながら話することができた。	○	○	○	○
④ 他の人の発表を聞いて、積極的に質問やコメントをすることができた。	○	○	○	○
⑤ 相手が答えやすい質問をすることができた。		○		○
⑥ 相手の話を十分理解することができた。		○		○
⑦ 相手の話がよく理解できなかったとき、相手に確認することができた。		○		○
⑧ あいづちを打ったりコメントをしたりしながら、会話をスムーズに進めることができた。		○		○
⑨ 聞き手にとってみやすいスライドを作ることができた。		○	○	
⑩ 短いコメントや感想を交えながら話することができた。		○	○	
⑪ 適切な引用の表現を使って話することができた。		○	○	○

複数のタスクに共通する評価項目は、全部で11項目である。評価項目①は、学習者自身によるテーマ(題材)選定が必要なタスク1とタスク3に共通している。評価項目の②③④は、4タスク全てに共通している。このうち、評価項目②③は発表や報告の際の話し方に関わる項目である。これは、聞き手にしっかりと伝わる話し方を重視しているためである。評価項目④は質疑応答やディスカッションに対する積極性を評価する項目であるが、これは、他の人の発表や報告を能動的に聞き、テーマについての理解を深めることを重視しているためである。評価項目⑤⑥⑦⑧はインタビューに必要な戦略として、タスク2とタスク4に共通している。評価項目⑨⑩は、スライドを見せながら発表を行うタスク2とタスク3に共通している。評価項目⑪は、インタビューを必要とするタスク2以降の3つのタスクに共通している。一般に、中級レベルの学習者にとって、適切な引用の表現を用いて、他の人の考えと自分の考えを区別しながら話すのは難しい

ものである。複数のタスクにこの到達目標を明示することで、学習者の意識を高めることができると考える。

このように、複数のタスクに共通の評価項目を設けることによって、学習者は、自分自身の伸びや改善点を可視化でき、より能動的・自律的にタスクに取り組むことができると考える。Can-do チェック表の評価項目を予め確認しておくことによって、Can-do チェック表がより有効に活用できるであろう。

なお、本書の Can-do チェック表は、学習者自身の自己評価のためのものであるが、評価項目の一部を取り出して、あるいは、そのまま、ピア評価や教師評価に利用することも可能である。

6. タスクと下位タスクの関係

料理を作るときにレシピ(料理の手順)があるように、一つのタスクを成し遂げるためには、いくつかの小さいタスクを段階的にこなしていかなければならない。ここでは、そうした小さいタスクを「下位タスク」と呼ぶ。

学習者にとって、タスクの目的や到達目標はもちろん、タスクの手順が明示されていることは、見通しを持って計画的にタスクを進めていく上で不可欠である。そのため、本書では、タスクの遂行に必要な下位タスクをステップ化し、何をどう進めればタスクが達成できるか、その手順が可視化してある。実際のタスクの遂行においては、一つのステップは複数の下位タスクから成る場合が多いが、本書では、学習者にとって活動のまとまりがわかりやすいような括りで、ステップを設定してある。4タスクのステップは、表5に示す通りである。

タスク1は全部で8ステップである。ステップ①で「おもしろいもの」の写真を撮り、ステップ②で自分が調べたことや考えたことをもとに発表の内容(アウトライン)を考え、ステップ③で学んだ表現を使ってステップ④で発表原稿を書く。ステップ⑤で発表の練習の際の留意点を確認し、各自リハーサルを行い、ステップ⑥で発表する。そして、ステップ⑦でテーマについてのディスカッションを行い、ステップ⑧で Can-do チェック表を用いた振り返り(自己評価)を行う。

タスク2には9つのステップがある。まず、ステップ①でインタビューシートをグループで作成する。ステップ②③でインタビューの流れとストラテジーについて学び、ステップ④でゲストにインタビューする。その後、ステップ⑤⑥でインタビュー報告のスライドと原稿を作成し、ステップ⑦でインタビュー報告を行う。インタビュー報告の後で、タスク1同様に、ステップ⑧のディスカッション

表5 4タスクとそのステップ

タスク1 発表「街で見つけた おもしろいもの」	タスク2 インタビュー「私の キャリアプラン」	タスク3 発表「地域の名所を 紹介する」	タスク4 インタビュー「私の ボランティア経験」
①「おもしろいもの」 の写真を撮る ②発表の内容を考える ③発表の構成と表現 を学ぶ	①インタビューシートを 作る ②インタビューのし方 を学ぶ ③インタビューの練習 をする	①紹介したい「地域 の名所」を決める ②インターネットで 情報を収集する ③その場所をよく 知っている人に話を 聞く	①テーマについて ブレインストーミング する ②インタビューシートを 作る ③インタビューの練習 をする
④発表の原稿を書く ⑤発表の練習をする ⑥発表をする ⑦発表を聞いて考え たことを話し合う ⑧タスクを振り返る	④インタビューをする ⑤発表の構成と表現 を学ぶ ⑥発表のスライドと 原稿を作る ⑦インタビュー結果に ついて報告する ⑧発表を聞いて考え たことを話し合う ⑨タスクを振り返る	④発表の構成と表現 を学ぶ ⑤発表の原稿を書く ⑥発表のスライドを 作る ⑦発表をする ⑧発表を聞いて考え たことを話し合う ⑨タスクを振り返る	④インタビューをす る ⑤報告書の構成と 表現を学ぶ ⑥報告書を書く ⑦インタビュー結果を 報告し合う ⑧報告を聞いて考え たことを話し合う ⑨タスクを振り返る

と、ステップ⑨の振り返りを行う。

タスク3は9ステップから成る。ステップ①で発表のテーマを決め、ステップ②③で情報収集を行う。ステップ④で発表の構成を確認した後、ステップ⑤で発表のアウトラインを作成してから原稿を書く。ステップ⑥で発表スライドの例を参考に各自スライドを作り、ステップ⑦で発表する。タスク1、タスク2と同様に、ステップ⑧⑨のディスカッションと振り返りが続く。

タスク4も9ステップである。このタスクは、ステップ①の「ボランティア活動」についてのブレインストーミングのディスカッションから始まる。そして、タスク2同様、ステップ②③でインタビューの準備をして、ステップ④でゲストにインタビューをする。ステップ⑤で報告書の構成と表現を確認してから、ステップ⑥で報告書を作成し、ステップ⑦で報告書の内容を報告し合う。ステップ⑧⑨は

他のタスクと同じである。

4つタスクのステップを比較すると、同様の下位タスクが一定の順序で、繰り返されていることがわかる。たとえば、「発表に必要な言語形式（構成や表現）の学習」→「原稿の作成」→「口頭での発表」→「ディスカッション」→「振り返り（自己評価）」といった一連の下位タスクが全てのタスクで繰り返されている。また、タスク2とタスク4では、共通して、「インタビューシートの作成」→「インタビューの練習」→「インタビューの実施」といった連続する下位タスクが組み込まれている。このように、異なるタスクで同様の下位タスクを繰り返し遂行することで、学習者は、インタビューや口頭発表の基本的な手順と手法を学ぶことができると考える。

7. おわりに

本稿では、現在開発中の中級教科書『出会い』の4つのタスクをどのように設計したかについて、①テーマとタスクの関係、②タスクの目的と学習項目、③タスクの到達目標、④タスクと下位タスクの関係という4つの観点から報告した。

4つのタスクをそれぞれのテーマ学習と関連づけて行い、4タスクで同様の下位タスクを繰り返し遂行することによって、学習者は口頭発表に必要なアカデミック・スキルと言語運用力を着実に身につけていくことができるであろう⁸。さらに、本書のタスクによって養われるアカデミック・スキルと言語運用力は、上級レベルで求められるレポート作成やプレゼンテーションなどの、さらに高度なタスクを遂行する際の土台となるはずである。

⁸ 工藤・山本(2011)は、抽象的なコンテンツと必然的な関係にある6つの「アカデミック・タスク」を遂行する過程で、「トピックの選定」「情報の収集」「情報の整理」「構成の決定」「言語表現化」「成果発表の準備」「成果発表」「振り返り」という8つの下位タスクのカテゴリーを同様に繰り返し、螺旋状に積み上げていくことによって、最終目標であるレポート作成とプレゼンテーションに必要なスキルと表現力が段階的に養われていくことを明らかにした。本書の作成にあたっては、こうした研究成果を参考に、下位タスクの設定を行った。

参考文献

- 大津友美・工藤嘉名子(2012)「アカデミックな日本語力養成を目的とした中級教材開発—基礎調査からテーマ選定までのプロセス—」『2012年日本語教育国際研究大会予稿集第1分冊』, p.289.
- 工藤嘉名子(2010)「アカデミック・プレゼンテーション能力を養うために—コンテンツ・ベース教材を用いた段階的指導法—」シンポジウム「大学におけるアカデミック・ジャパニーズの現状と課題」2010年2月27日 於)東京外国語大学
- 工藤嘉名子・大津友美(2011)「学部教養科目で求められる『知的活動』に関する調査—アカデミックな日本語力養成のための教材開発に向けて—」『日本語教育方法研究会誌』Vol.18-2, pp.26-27.
- 工藤嘉名子・山本富美子(2011)「アカデミック・タスク」と下位タスク、言語スキルとの関係」『2011年度日本語教育学会秋季大会予稿集』, pp.257-262.
- 山本富美子(2007)『国境を越えて[本文編]改訂版』新曜社
- 山本富美子(2012)「アカデミック・タスクで活性化されるコンテンツの意義と活用法」『東京外国語大学留学生日本語教育センター統合20周年記念国際シンポジウム「これからの教材開発・教育リソース研究を考える」予稿集』, pp.46-47.
- 山本富美子・瓜生佳代・甲斐朋子(2007)『国境を越えて[タスク編]』新曜社

Task Design of the Intermediate Japanese Textbook, *Deai*

KUDO Kanako

The Japanese Language Center for International Students, Tokyo University of Foreign Studies has been developing a new Japanese textbook for upper intermediate students. The textbook is entitled *Deai*, and consists of six themes related to Japanese society and culture, and four tasks (two oral presentations and two interviews) corresponding to the themes. This paper illustrates how the four tasks are designed from the following perspectives: 1) connections between themes and tasks; 2) purposes and key learning points of the tasks; 3) task goals; and 4) relations between tasks and subtasks.

First, each theme and its corresponding task are strongly connected to each other through a specific common concept such as “Japanese culture looked at through one’s own cultural filter” and “the history of a nearby local community and the local individual’s feelings toward the community.” Therefore, a deep understanding of the themes of the textbook is indispensable to carrying out the tasks, and vice versa.

Second, each task has two purposes determined by two perspectives, “understanding of the theme” and “language competency.” With those purposes, the key learning points of each task are determined by two aspects, “academic skills” and “language expressions.”

Third, the goals of each task are clearly expressed in a “Task Can-do Checklist,” in a manner reflecting the purposes and key learning points of the task. Learners can self-check their own levels of achievement of the task goals, through which they can recognize their own improvements as well as problems.

Fourth, each task consists of eight or nine steps to follow, the “subtasks”, so that the learners can achieve the task goals in a step-by-step manner. In carrying out the four tasks, some common subtasks are repeated sequentially, such as “learning the structure and expressions of the oral presentation,” “writing a script,” “making an oral presentation,” “discussing the theme,” and “doing a self-check of the task.”

Users of this textbook will surely be able to acquire the academic skills and Japanese language proficiency by carrying out the four tasks in connection with the six themes and by repeating the same subtasks during the tasks.